琉球大学学術リポジトリ

沖縄の外人住宅に関する研究
-その歴史的展開及び計画内容を中心として-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 地域社会研究所 公開日: 2014-02-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小倉, 暢之, Ogura, Nobuyuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/28477

第４章　民間住宅への影響

外人住宅の地元住宅への影響という点については、直接、間接に様々な点が指摘されよう。その前に外人住宅ブームがピークを迎えた６０年代初期の状況にも注意すべき点があるように思われる。それは先ず第一に外人住宅の出現が一般民間のコンクリート造住宅の出現に明らかに先んじていたというのではなく、民間でも数は少ないながらも存在していた事、従ってスタイルに殆ど変化の無い外人住宅と地元民間住宅の３０年間にわたる相対レベルの変化は大きく、影響内容が時間差によって異なる場合もある。それは例えば床面積の差、生活水準の差といったものの変化は強く関わるものであり、こうした点が外人住宅の民間住宅に影響しやすい部分としにくい部分を作った点は考慮されなければならない。

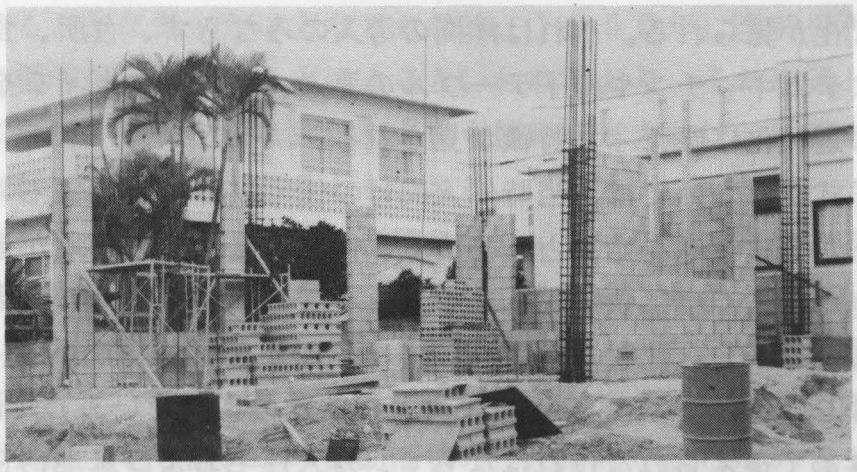
さらには、同じ洋式住宅である基地内住宅との関わりである。既に述べたように６０年代の基地内住宅の戸数は約３千戸ないし４千戸程度であり、量としてはかなりの量である事、一方、外人住宅は復帰時点でおよそ１万戸以上といわれている。従って民間住宅への影響という点においては特に生活様式については外人住宅が単独で影響を及ぼしたとみるのではなく、基地内住宅を含めた洋式化の影響とみるのが妥当であると思われる。しかし、量の点からは外人住宅の方が基地内住宅の倍以上を占め、かつ一般民間地域の中にあった点を考慮すれば、地元への直接的影響においては明らかに外人住宅が主要な存在であったといえよう。外人住宅の民間住宅への影響について本章では構造、平面、生活様式の三点について述べることにする。

４－１　住宅構造

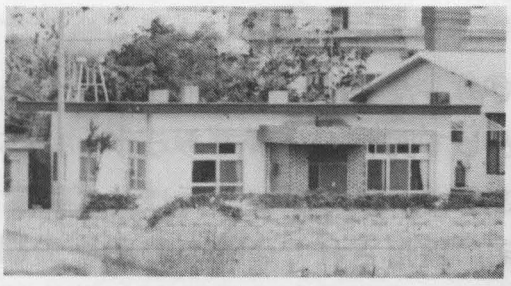
外人住宅の民間への影響について構造面からは、先ずコンクリート造の普及があげられる。特にフラットルーフについては大きな影響が認められる。民間住宅の殆どは基地内住宅の様なアスファルトルーフィングにコーティングという複雑な仕上げをせず、約１２センチ厚の屋根スラブをコンクリート打放しに金コテ仕上げという極めて簡素な仕上げである。外人住宅の仕上げも同様で、中には銀色ペイントを塗るものもあったが、それもアスファルトルーフィングは施さず、コンクリートスラブに直に塗るものであったから外人住宅の経験がかなり参考になったものと思われる。無論建設コストの点からも熟練を要するルーフィングを行うと高くなるわけで、省けるものは省こうとするところに採算ベースという制約が働いているのが読み取れる。沖縄の自然環境下では基地内住宅のようなアスファルトルーフィングは無くても十分安全である事を多く

の外人住宅の実例から経験的に習得したといえよう。また、雨水を受ける雨樋を付けないスタイルも伝統的木造民家でもなかったものであるが、こうした多くの外人住宅あるいは基地内住宅のスタイルの影響とも思われる。雨樋については近年の住宅では多く見られるが、設計上最も考慮すべき点は金具の錆や台風による破損であり、これらが十分安価に解決しない限り外人住宅のスタイルを借用するのが自然な成行きでもある。

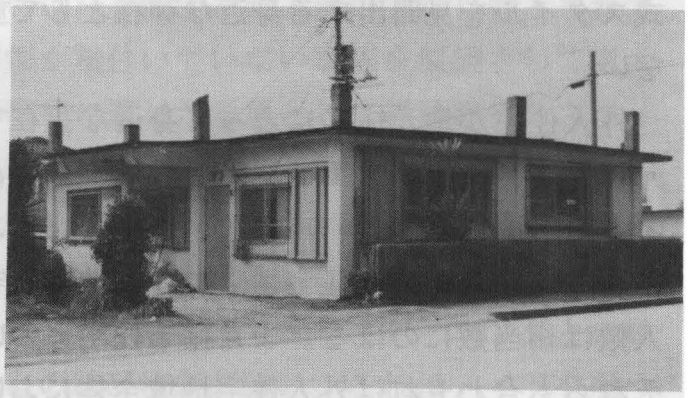
次にコンクリートブロック造の普及についてであるが、前章で述べた様に60年代初期の民間用ブロックは品質に問題があり、基地内住宅の様な正統なブロック造壁式工法として定着するのが難しかった点を考慮しておく必要がある。そしてまた、ブロック造壁式工法の場合の構造壁による続き間の取りにくさ等の平面の自由度の低下を合わせて地元住民の生活様式に対して不都合な点があってブロック造壁式住宅の普及には制約があったことも考慮しなければならない。こうした生活慣習の違いは、また床の造りにもあり、外人住宅はコンクリートの土間にアスタイル仕上げという下足を前提にしたスタイルであるのに対し、民間では床を上げて土間と区別する伝統的慣習を強く保持するためコンクリート床は受け入れ難かった。しかし、こうした生活慣習の差による問題があるにせよコンクリートブロックを積極的に住宅に用いようとする傾向は強く、



写真－64　コンクリート造ラーメン構法の民間住宅（ブロック先積）



写真－65　コンクリート造ラーメン構法の民間住宅



写真－66　ラーメン構法の外人住宅
（楚辺ハウジングエリア）

コンクリート造ラーメン構法の帳壁として用いられた。外壁は外人住宅同様にモルタルにペイント仕上げとするのが一般的であった（写真－64、65）。

民間住宅へのコンクリート造の普及については、さらにコンクリート工法のパターン化という側面も重要に思われる。すなわちスラブ配筋等のマニュアルであるが、今日離島各地に同じ様な型のコンクリート住宅が多く見られるのもそれらの作り手の多くが５０年代、６０年代の軍工事ないし本島都市部の民間コンクリート工事を経験しており、そこで習得したコンクリート住宅の作り方が離島各地の住宅の基本とされていたのである。これら離島の住宅に見られる部材寸法、そして配筋方法等は殆ど共通しており、パターン化されたコンクリート住宅生産の普及という観点からも外人住宅の展開に共通性が見られる。

４－２　住宅平面

外人住宅の中でも最も多い３ベッドルームタイプの規模は約３０坪（約１００平米）内外であり、当初から地元民間住宅の平均値をはるかに超えていた。例えば１９６５年に建てられた民間持家の平均床面積は６０平米に満たない状況で、平均値が１００平米を超すのは１９７５年以後である。こうした格差があるにせよ、地元のコンクリート造住宅の建設においては幾つかの点において明確な洋式化が見られる。それは洋間の導入のみならず、台所、食堂の近代化に伴うシステムキッチンや椅子テーブルの導入、また水洗トイレを始めとする衛生設備の近代化に際だった特徴が見られる。

部屋の洋式化については、当時外人向けの住宅以外に公営住宅でも１９５６年の那覇市営若狭住宅を始めとして６０年代には幾つかの団地が建設されており、一戸当りの床面積は狭い乍も２ＤＫタイプの板床ダイニングキッチンが登場している。しかし、建設戸数においては１９５６年が２５０戸、６２年は３４０戸、６５年には1,１６９戸であり、洋式化の影響という点ではこれら公営住宅も含めて捉えられなければならず、外人住宅および基地内住宅のみの影響とはいいきれない。しかし、外人住宅は地元住民にとって日常生活の中で洋式スタイルを見聞出来る身近な存在として重要な要因であったことに変わりはない。

外人住宅が地元住民にとって身近な存在であったもう一つの側面は多くの地元住民がメイド、大工、庭師、設備職人等として関わった事であろう。特にメイドは多いところで一戸に数名、少ないところで一戸ないし二戸に一人程度の割合で、殆どの外人住宅さらには基地内住宅に雇用されていたのであり、その人数は相当数にのぼる。また同じ住宅についてもメイド、職人の交替があり、それらも合わせれば外人住宅地域全体における文化的影響はかなり強いものが

あったと想像される。したがって特に現在の中、高年齢層の地元住民にとっては、洋式住宅の使い方を実際に体験する場を得たことが後に彼等が建設した住宅にこれら洋式の諸要素を取り入れるのに大いに影響したものとみることができよう。

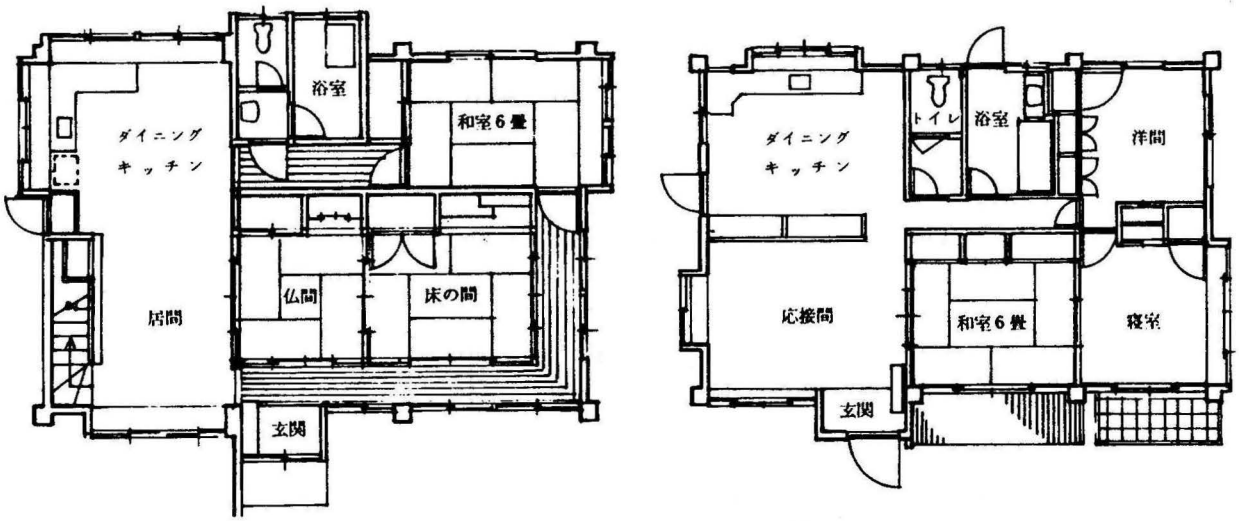
民間住宅の台所回りの近代化は燃料の変化や設備器具、システムキッチン等の出現によって大きく推進されるのであるが、外人住宅の内容は現在でもそのまま民間住宅の内容としても十分なものであり、規模、内容ともに手本となり得た。それは点数制の中でも特に台所回りに関する規定であるステンレス製ダブルシンクを必須条件とする事や、収納棚の総延長に応じた点数配分等からも理解できる。

次に水洗トイレについて述べると、沖縄での普及は日本本土に比べて一般住宅へはかなり早くから普及している。平成3年8月31日付けの琉球新報に掲載された記事によれば、県内で水洗トイレを家庭で用いているのは942,565人で全人口の76.1%に当り、日本全国で水洗トイレを用いているのが約6割に当るとある。そしてまた同記事には普及が早かった理由として米軍工事で業者が技術を学んだ点等をあげており、こうした実際に接する機会が基地内外の軍関係施設において得られたのであった。日本本土で一般家庭に水洗トイレが普及する大きなきっかけとなったのは、1960年に当時の住宅公団が洋式トイレを標準設計にしたことによるといわれており、それを通して多くの市民が住宅に水洗トイレを取り入れたという経緯を考えれば、沖縄が本土に比べて幾らか先行していた点があるともいえる。

さらに民間住宅の水回りについての特色はシャワーの普及にもみられる。外人住宅では基地内住宅同様に浴槽、シャワー、洗面台、水洗トイレはセットになってタイル床の一室に設けられている。規模の大きい住宅では主寝室に専用の補助浴室を設けているところがあって、ここでは浴槽を省いているケースが多い。沖縄の民間住宅では、この補助浴槽の様に浴槽を設けないでシャワーと水洗トイレ、洗面台で浴室を構成するケースが多く見られる。これは渇水による慢性的水不足に対する対策、あるいは汗を流す事が入浴の主な目的とされていて湯舟に浸かって身体を温める習慣が根付いていない事等を原因として考えることが出来るが、そうした地元の事情に適した形態として補助浴槽のスタイルが民間住宅に取り入れられたものと思われる。

システムキッチンの民間住宅への普及にも著しいものがあるが、外人住宅と民間住宅の違う点はキッチンの独立性によく見られる。殆どの外人住宅は基地内住宅同様ダイニングと明確にスペースが分離されており、ダイニングとの結び付きよりはユーティリティルームとの結び付きが強い。これはメイドを雇う

生活形態にもよると思われるが、作業空間と居住空間との区別を明らかにしている。民間住宅ではメイドを雇う例は少なく、また当時の住宅の面積が少なく、ユーティリティルームと台所を独立した部屋にする余裕もなかったので６０年代の住宅には台所と食堂を一体化した例が多い。しかし床面積が大きくなった７０年代以降の民間住宅（図－13）においてもユーティリティルームを独立して設ける例は少なく、これには家事の作業形態に根本的な違いがあるものと思われる。



図－13　地元民間住宅の平面図　（「居住風土のデザイン」より引用）

４－３　生活様式

住宅の構造や平面の他にも生活様式においても幾つか影響が見られる。主なものとしては電気製品、自動車、造園等があげられる。電気製品についてはエアコン、大型冷蔵庫、洗濯機等があるが、米国製のものだけでなく日本製も多く輸入されている。これらも多くのメイド達が実際に扱い方を修得していた点も普及効果の要因の一つとしてあげることができる。こうした家電製品は、軍を経由して外人住宅に入ってくるものが多かったが、借家人の中には転勤時にそれらをそのまま置いて出る者も多く、また、軍払い下げの中古製品を家主が仕入れて設置することもあった。当時の沖縄では軍払い下げ品を専門に扱う業者も多くいて、那覇市内のひめゆり通りは特にこうした業者が多く集中する所として知られていた。その他にもコザ市、宜野湾市といった外人住宅や基地の周辺市街地でも多く、現在でもその名残りを見ることができる。業者の中には製品の修理、再生を行う者もいてかなりの量の中古家電製品が流通していたと

いわれる。外人住宅では２００Ｖも使用していたが、地元の民間住宅では１００Ｖのみを使用している場合が殆どで、そのため大型冷蔵庫、洗濯機等、２００Ｖ用の家電を使用する場合は変圧器を付けて使用した。

自動車も６０年代初期で新車の価格は当時の民間住宅の建設費に近く、一般家庭に広く普及するのはまだ後のことである。しかし、家電製品の場合と同様に中古車も修理再生が盛んに行われ、軍人軍属及びその家族が残していった多くの車は地元社会にも流れていった。車社会の発達した米国の生活様式の中にドライブインレストランやドライブインシアター等があるが、そうした施設の普及も沖縄では日本本土よりも早く、６０年代には既に各地に出現し定着していたことからも車社会の発達状況が窺える。

次に造園については、基地内の住宅地区は住宅周辺に広々とした芝生が設けられており、一目で米国らしさを印象付けられる。外人住宅もこうした敷地の広さを参考にしており、一戸当りおよそ百坪内外を目安にしていたといわれる。したがって３０坪程度の住宅の他は地面になるわけで、その使い方は駐車場、サービスヤードの他は殆ど一面に芝生を植える家が多い。地元民間住宅でも芝生の庭は積極的に取り入れられたのだが、その理由としては、元々台風常襲地帯である沖縄には日本庭園の様な強風に弱い樹木を多く用いる造園は不向きである事、そしてまた石垣やガジュマル（台風に強い在来の常緑樹の一種）を多用するとハブ等の有害生物が生息する心配がある。その点、芝生の庭は比較的メンテナンスが容易で、日差しの照り返しも和らぐため造園の素材としては良好である。また沖縄の家庭では食生活の点でも米国式のバーベキューが日常生活の中に定着しており、こうしたバーベキューを屋外で行う場としても芝生の庭は便利である。造園については、むしろそれまで庭園らしきもののなかった一般住宅に芝生を敷き詰めた造園という新たなスタイルを持ち込んだという点において米国式造園の影響は大きなものがあるといえよう。

以上、外人住宅の地元民間住宅への影響について様々な側面を述べたが、これらに共通しているのは、基本的には地元住民にとって直接参考になるものとか便利なものは積極的に導入しようとする取捨選択的な受け入れ方である。軍人軍属との生活格差が著しかった当時においては全く同じ内容のものを整えるのは難しい状況であったが、その中で部分的な採用もしくは改変等の工夫によって実用的な形に作り上げていったといえよう。

・・・・・・・・・